

「本日もご指導、ありがとうございました」

「うん、お疲れ様」

軽くお辞儀をしてトレーナー室を去るのは担当のグラスワンダー。

ここ最近ではトレーニングに加えレースが多くなる時期であるためローテーションを組んだり、状況に応じてメニューを調整したりするなど.....とにかく忙しくなる時期だ。文字どおり「寝る間も惜しむ」状態であり、男性としてはここで大きな問題に直面する。そう、「溜まってくる」のだ。計画的に発散しなかった自分の責任といえそうだ。しかし限界なものは限界で、今日なんかは学内で勃たないようにするのにするのに必死だった。早急に対処する必要性を感じた俺はソファに腰かけ、すでに最大まで硬くなった己のそれを解放してやる。大丈夫、この時間の校内はほとんど人がいない。妄想の中で誰を手籠めにしようかと考えていると、自然とグラスを想ってしまう。想像とはいえ自分の教え子に劣情をぶつけるのは普段ならば罪悪感が許さない。しかし何週間にもわたって蓄積された情欲がそのたがを外してしまった。

グラスワンダー。彼女の美しい栗毛の髪。控えめながら気を引く胸。女の子らしい腰回り。それらに手を伸ばす。

「グラス.....っ」

快楽に思わず名前を口にしてしまう。声を抑えようという考えは興奮の向こうへと消えてしまったらしい。

「好きだぞ.....グラス.....ッ！」

腰を打ち付ける度にあの綺麗な声の上擦っていく様を思い浮かべながら絶頂へと近づいてゆく。

「トレーナーさん.....？」

その声を聞いてすでに速まっていた心臓が一際大きく跳ねた。そこに立っていたのは手を口に当て驚きの表情を浮かべた我が担当。

「あっ.....その.....」

恥ずかしくて、情けなくて、『違うんだグラス』なんて出まかせの言い訳も言葉にならなかった。

「トレーナーさんったら」

ああ、最低な奴だ。隠しもせずに担当でシコるなんて。

「そういう事でしたらもっと早く仰ってくれればいいのに……」

「え？」

そう言うと彼女はソファまでやってきて隣に座る。見たこともないような熱っぽい目をしていた。

「いいですよ……そのまま続けてください……♡」

グラスの甘い囁きが耳をくすぐる。まだ頭では状況を呑み込めていないが、手を動かさずにはいられなかった。

「私とまぐわう想像をなさってたんですか？名前を呼ぶ声、とってもかわいかったですよ♡」

体を擦り付けるように密着してきて、彼女の感触と匂いに支配される。

「大丈夫です♡私の事だけ考えて、気持ちよくなってほしいです……♡」

意図せずとも扱くペースが速くなる。あらゆる感覚をグラスに染め上げられての自慰の快樂に我慢が効く筈もなく、今にも出そうになる。

「グラスっ……もう……」

「はいっ♡射精するところ、私に見せてください♡♡」

グラスの顔が下がったかと思うと、首筋を彼女の舌が伝う。絶頂の直前に上乗せされた快感が手伝い、普段なら考えられない量の精を放った。

「まあ……♡」

恍惚とした表情で床に出たものを眺めるグラス。自分の担当にこんな一面があったのかと、余韻に浸りながらも驚嘆する。
すると、彼女が徐に立ち上がった。

「グラス...？」

「トレーナーさん、もう終わりですか.....？」

ぱさり、とスカートが床に落ちる。

「殿方の意地、見せてくださいね♡」

* * *

スカートを脱ぎ捨てたグラスを前に思わず唾を飲む。
清楚な彼女らしい純白の下着。

「見ているだけでは始まりませんよ？」

それに手が掛かりゆっくりと、見せつけるように足元まで下げる。秘部はすでにぐっしよりと濡れていて、彼女もまた興奮していることが窺える。

すでに一度絶頂を迎えた自分の分身が再び熱を帯びてゆく。こんな誘われ方をして耐えられる男がいるだろうか。自分もまた邪魔なものを脱ぎ去り、グラスの前まで行く。陶芸品の曲線を思わせる美しい腰を掴み、痛いほど硬くなったそれを下腹部に押し当てるように彼女を抱き寄せた。

「.....すごく嬉しい♡」

頬を赤く染めたグラスと目が合い、口づけを交わす。理性などはとっくに喪失しており、すぐに舌を絡め合う所までエスカレートしてゆく。

グラスワンダー。おっとりしていて、だけれど誰よりも負けず嫌いな我が担当。その彼女とこんな淫行に及んでいる現状が無性に性欲を掻き立てる。ここにいるのはもうト

レーナーとそのウマ娘ではなく、下半身をすり合わせながら互いを貪る、二匹の牡牝でしかなかった。

「んうっ♡」

制服に手を入れ胸をまさぐると塞がれた口の隙間から甘い声が漏れる。手をまわした腰が物欲しそうにうねっている事から察するに、軽く達してしまったのかもしれない。口を離し、お互いに一息つく。グラスは目尻に少しの涙を浮かべて肩で息をしている。下に目をやると、先程とは比べ物にならない量の愛液が内股を濡らしていた。

「トレーナーさん、そろそろ」

彼女の手が腕に添えられる。力が入っているわけでもないが、その手に導かれるようにして壁際までたどり着く。壁を背に、グラスはその青い目でこちらをじっと見つめる。

「いいんだな？」

「はい、今日は大丈夫な日なので.....♡」

そう言うとグラスが片脚を上げる。それを掴み、そそり立つ己を割れ目に触れさせた。四十八手で言う「立ち鼎」。ここまで来て躊躇うことはない。グラスの腕が背中に回されると、ゆっくりと彼女の中へと入っていった。

「ああ.....っ♡」

男を受け入れた快楽にグラスがビクッと反応する。接合部から少しばかり血が出ている、初めてだったのだろう。

「痛くないか？」

「大丈夫.....っ、ですから.....止めないで♡」

問題のないことを確認し、一気に最奥まで挿入する。こちらの動きに呼応し、グラスの膣内が男根に絡みついてくる。先端で奥をグリグリと刺激してから、規則的な挿入を開始した。

「あっ♡あん♡これ凄っ.....んあ♡♡」

行為中の彼女の声は想像の何倍も艶めかしい。その媚びるような甘ったるい声が聴きたくて、ついペースを早めてしまう。

「やあっ♡そんなに激しく——ッ♡」

言葉にならない嬌声を上げながらグラスは快樂に浸っている。奥に届くたびにきゅう、と締め付けられ、下半身が蕩けそうな感覚に襲われた。

「とれーなあさんっ♡すき♡すきですっ♡♡♡」

あのグラスがこんなに乱れた姿をさらしている事に若干の優越感を感じずにはいられなかった。

俺も好きだ、と返しさらにペースを早める。グラスの腰がカクカクと動き、絶頂が近いことを知らせる。

「もう出る.....っ」

「はい.....あっ♡ナカ、にっ♡なかに出してください♡」

たまらなくなり、彼女にまたキスをする。ラストスパートをかけてから一番奥まで突き刺す。

「~~~~~♡♡♡♡♡」

グラスの膣内が締まると同時にどくん、どくんと己が脈打ち、彼女の胎に欲望をすべて吐き出した。

* * *

二人で余韻に浸った後、諸々の後片付けを終えてからようやく帰り支度が終わった。外はだいぶ暗くなったがグラスの門限には間に合うだろう。

「トレーナーさん」

帰り道、別れる前に呼び止められる。

「大丈夫な日とはいえ最後までシましたので.....これからもよろしくお願いしますね？」

そう言って彼女はいつもの笑顔を見せる。この関係は長く続きそうだ。